副鼻腔に転移した腎癌例

大野 恒久・野々村光栄・菊川 達雄

A Case of Renal Cell Carcinoma, Metastasized to the Paranasal Sinuses

Tsunehisa Ohno, Mitsuharu Nonomura and Tatsuo Kikugawa

(Sizuoka City Hospital)

We report a case of renal cell carcinoma that metastasized to the paranasal sinuses. A 78-year-old male who had had a left nephrectomy 5 months before under the diagnosis of renal cell carcinoma, complained of epistaxis, nasal obstruction and visual disturbance. A CTscan demonstrated a tumor in the nasal cavity and paranasal sinuses. An open biopsy revealed that the histopathologic diagnosis was metastatic renal clear cell carcinoma (grade 2) to the paranasal sinuses. We performed radiation therapy (50 Gy) to the paranasal sinuses as conservative treatment. Currently, the tumor in the paranasal sinuses seems to be growing gradually.

Key words : renal cell carcinoma, paranasal sinuses

はじめに

鼻・副鼻腔に他臓器からの転移性腫瘍が発生するのは比較的まれである。今回、われわれは腎細胞癌手術施行5ヵ月後に鼻出血、視力低下、眼球突出をきたした副鼻腔転移例を経験したのでここに報告する。

症 例

症例：78歳、男性。

主訴：右鼻出血、鼻閉、右視力低下。

既往歴：左腎摘出術（平成12年5月12日）、糖尿病、心筋梗塞。

現病歴：平成12年10月頃より右鼻出血、鼻閉、右視力低下が出現。他施設にて易出血性の副鼻腔腫瘍性病変として加療されていた。また、当院泌尿器科にて腎癌に対する術後経過観察をされていたが、11月21日腎癌の肺転移がみつき、インターフェロン- α （以下、INF- α ）治療目的にて当院泌尿器科に入院、当科紹介となった。

所見：右中鼻道から総鼻道にかけて暗赤色表面不整で凝血塊を伴う易出血性の腫瘍を認めた。また、右眼の視力低下（裸眼視力にて0.02）と眼球突出を認めた。耳、

咽・喉頭、頸部には異常所見はみられなかった。

入院翌日、右鼻腔の腫瘍から生検施行したところ、病理組織検査にて腎細胞癌の転移（腎淡明細胞癌 grade 2）と判明した。

病理組織所見：弱拡大像では全体的に赤血球を含んだ血管が豊富にみられ、細胞質の明るい腫瘍細胞が全般にシート状に増殖している。一部乳頭状に配列しているところがみられる（図1左）。

強拡大像でも細胞質の明るい腫瘍細胞の増殖がみられ、一部核の大小不同や核形の不整がみられるが、ほとんどが円形あるいは楕円形で、全体的にやや大きい（図1右）。

また、摘出した腎の病理組織も同様の所見であり、腎淡明細胞癌 grade 2 の副鼻腔転移と診断された。

副鼻腔造影 CT：鼻腔、右上顎洞、右篩骨洞、一部右蝶形骨洞、眼窩を占める不均一に造影効果を受ける腫瘍陰影を認める（図2）。

治療：肺転移や糖尿病、心筋梗塞などを考慮し、副鼻腔の腫瘍に対しては手術適応なしと考え、右副鼻腔に外照射を1日2Gyを25回、総量で50Gy施行した。また、

図1 右副鼻腔腫瘍病理組織像 (HE 染色)

左：血管が豊富にみられ，腫瘍細胞が全般にシート状に増殖している (×20)。

右：細胞質の明るい腫瘍細胞の増殖がみられ，核形はほとんどが円形で，全体的にやや大きい (×400)。

図2 副鼻腔造影 CT 所見

鼻・副鼻腔を占める腫瘍性病変を認める。

左：右眼窩，蝶形骨洞へ進展している。

右：上顎洞後壁への浸潤がみられる。

肺転移に対する治療として泌尿器科にて $\text{INF-}\alpha$ の全身投与を 300 万単位週 2 回施行した。

治療後副鼻腔造影 CT: 前回の CT と比べて内部の造影

効果は低下しているが，全体の大きさは増大している (図 3)。

治療後所見：右眼窩への進展も増大し，右視力は光覚

図3 治療後副鼻腔造影CT所見

前回と比べ全体の大きさは増大している。

左：眼窩への進展が増大している。

右：上顎洞外への浸潤が増大している。

弁となり眼球突出も顕著になった。また、黄色の易出血性の腫瘍が右中鼻道から総鼻道にかけて占拠していた。

その後当科外来にて経過観察しているが、緩徐ながら副鼻腔腫瘍は増大傾向を示している。

考 察

鼻・副鼻腔に他臓器からの転移性腫瘍が発生するのはきわめてまれである。過去の文献をみると、Bernsteinら¹⁾は鼻・副鼻腔の転移性腫瘍82例を集計し、その原発巣として腎が最も多く40例(48.8%)、次いで気管支・肺10例(12.2%)、乳房8例(9.8%)の順と報告している。また、世良ら²⁾は22例を報告し、原発巣として腎が最も多く12例(54.5%)、次いで子宮3例(13.6%)、大腸2例(9.1%)となっている。このことから、転移性副鼻腔腫瘍のうち半数が腎癌の転移であるものといえる。

逆に、腎癌から頭頸部への転移の報告をみると、大越ら³⁾は409例の腎癌の転移部位を剖検により詳細に調べているが、甲状腺17例(4.2%)のみ記載されていた。また、里見ら⁴⁾は124例の腎癌を検討しているが、62例(50.0%)に転移がみられ、そのうち頭頸部領域への転移例は4例(3.2%)となっている。

次に腎癌の頭頸部転移例を集めた蔦ら⁵⁾の報告をみると、118例のうち50例(42.4%)は副鼻腔への転移で、次いで甲状腺が27例(22.9%)、耳下腺が9例(7.6%)である。

治療方法としては、転移の有無を問わず原発巣に対して手術的摘除が有効かつ確実な治療法であり、生存期間を有意に延長するという報告がある⁶⁾。単発の転移巣に対しても、積極的に手術的摘除を行うのが効果的という報告があり、また多発転移例に対してはINF- α 、インターロイキン-2(IL-2)などの全身投与による免疫療法、放射線照射、化学療法などの補助的手段を考慮しなければならない⁷⁾。今回の症例では多発性肺転移、糖尿病、心筋梗塞などの既往を考慮し、手術は行わず保存的治療のみとした。

ま と め

- (1) 副鼻腔に転移した腎癌の1例を報告した。
- (2) 副鼻腔転移性腫瘍は比較的まれであり原発巣としては腎癌が最も多い。

(平成 13 年 4 月, 静岡市) において口演した。

参考文献

- 1) Bernstein JM, Montgomery WW, Balogh K, et al. : Metastatic tumors to the maxilla, nose and paranasal sinuses. Laryngoscope **76** : 621 ~ 650, 1966.
- 2) 世良公志, 夜陣紘治, 田頭宣治, 他 : 転移性上顎洞癌の一例. 耳鼻臨床 補 27 : 89 ~ 96, 1988.
- 3) 大越正秋, 長谷川昭 : 腎腺癌の臨床病理学的統計. 日泌尿会誌 **59** : 1105 ~ 1116, 1968.
- 4) 里見佳昭, 松浦謙一, 小川 英, 他 : 腎癌の耳鼻咽喉科領域への転移症例. 臨泌 **28** : 43 ~ 48, 1974.
- 5) 薦 佳尚, 井野千代徳, 山下敏夫, 他 : 腎細胞癌の耳下腺転移の 1 例. 耳鼻 **36** : 7 ~ 10, 1990.
- 6) Flanigan RC, Blumenstein BA, Salmon S, et al. : Cytoreduction nephrectomy in metastatic renal cancer; the results of southwest Oncology Group trial 8949. Proc Am Soc Clin Oncol **19** : 2a, 2000.
- 7) 富田善彦 : 腎細胞癌有転移症例の治療. 臨泌 **54** : 829 ~ 839, 2000.

原稿受付 : 平成13年 9 月26日
原稿採択 : 平成13年10月31日 急載
別刷請求先 : 大野恒久
〒 420-0853 静岡市追手町 10-93
静岡市立静岡病院耳鼻咽喉科